泉ある家

宮沢賢治

青空文庫

これが今日のおしまいだろう、と云いながら斉田は青じろい薄明の流れはじめた県道に立って崖に露出した石英斑岩から一かけの標本をとって新聞紙に包んだ。

富沢は地図のその点に橙を塗って番号を書きながら読んだ。斉田はそれを包みの上に書きつけて背嚢に入れた。

二人は早く重い岩石の袋をおろしたさにあとはだまって県道を北へ下った。

道の左には地図にある通りの細い沖積地が青金の鉱山を通って来る川に沿って青くけむった稲を載せて北へ続いていた。山の上では薄明穹の頂が水色に光った。俄かに斉田が立ちどまった。道の左側が細い谷になっていてその下で誰かが屈んで何かしていた。見るとそこはきれいな泉になっていて粘板岩の裂け目から水があくまで溢れていた。

（一寸おたずねいたしますが、この辺に宿屋があるそうですがどっちでしょうか。）

浴衣を着た髪の白い老人であった。その着こなしも風采も恩給でもとっている古い役人という風だった。蕗を泉に浸していたのだ。

（宿屋ここらにありません。）

（青金の鉱山できいて来たのですが、何でも鉱山の人たちなども泊めるそうで。）

老人はだまってしげしげと二人の疲れたなりを見た。二人とも巨きな背嚢をしょって地図を首からかけて鉄槌を持っている。そしてまだまるでの子供だ。

（どっちからお出でになりました。）
（郡から土性調査をたのまれて盛岡から来たのですが。）
（田畑の地味のお調べですか。）
（まあそんなことで。）
老人は眉を寄せてしばらく群青いろに染まった夕ぞらを見た。それからじつに不思議な表情をして笑った。
（青金で誰か申し上げたのはうちのことですが、何分汚ないし、いろいろ失礼ばかりあるので。）（いいえ、何もいらないので。）
（それではそのみちをおいでください。）
老人はわずかに腰をまげて道と並行にそのまま谷をさがった。五、六歩行くとそこにすぐ小さな柾屋があった。みちから一間ばかり低くなって蘆をこっちがわに塀のように編んで立てていたのでいままで気がつかなかったのだ。老人は蘆の中につくられた四角なくぐりを通って家の横に出た。二人はみちから家の前におりた。
（とき、とき、お湯持って来。）老人は叫んだ。家のなかはしんとして誰も返事をしなかった。けれども富沢はその夕暗と沈黙の奥で誰かがじっと息をこらして聴き耳をたてているのを感じた。
（いまお湯をもって来ますから。）老人はじぶんでとりに行く風だった。（いいえ。さっきの

泉で洗いますから、下駄をお借りして。）老人は新らしい山桐の下駄とも一つ縄緒の栗の木下駄を気の毒そうに一つもって来た。

（どうもこんな下駄で。）（いいえもう結構で。）

二人はわらじを解いてそれからほこりでいっぱいになった巻脚絆をたたいて巻き俄かに痛む膝をまげるようにして下駄をもって泉に行った。泉はまるで一つの灌漑の水路のように勢よく岩の間から噴き出ていた。斉田はつくづくかがんでその暗くなった裂け目を見て云った。（断層泉だな。）（そうか。）

富沢は踝をつけてある下のところに足を入れてシャツをぬいで汗をふきながら云った。

頭を洗ったり口をそそいだりして二人はさっきのくぐりを通って宿へ帰って来た。その煤けた天照大神と書いた掛物の床の間の前には小さなランプがついて二枚の木綿の座布団がさびしく敷いてあった。向うはすぐ台所の板の間で炉が切ってあって青い煙があがりその間にはわずかに低い二枚折の屏風が立っていた。

二人はそこにあったもみくしゃの単衣を汗のついたシャツの上に着て今日の仕事の整理をはじめた。富沢は色鉛筆で地図を彩り直したり、手帳へ書き込んだりした。斉田は岩石の標本番号をあらためて包み直したりレッテルを張ったりした。そしてすっかり夜になった。

さっきから台所でことことやっていた二十ばかりの眼の大きな女がきまり悪そうに夕食を運んで来た。その剝げた薄い膳には干した川魚を煮た椀と幾片かの酸えた塩漬けの胡瓜を載せて

いた。二人はかわるがわる黙って茶椀を替えた。

（この家はあのおじいさんと今の女の人と二人切りなようだな。）膳が下げられて疲れ切ったようにねそべりながら斉田が低く云った。

（うん。あの女の人は孫娘らしい。亭主はきっと礦山へでも出ているのだろう。）ひるの青金の黄銅鉱や方解石に柘榴石のまじった粗鉱の堆を考えながら富沢は云った。女はまた入って来た。そして黙って押入れをあけて二枚のうすべりといの角枕をならべて置いてまた台所の方へ行った。

二人はすっかり眠る積りでもなしにそこへ長くなった。そしてそのままうとうとした。

ダーダーダーダースコダーダー

強い老人らしい声が剣舞の囃しを叫ぶのにびっくりして富沢は目をさました。台所の方で誰か三、四人の声ががやがやしているそのなかでいまの声がしたのだ。

ランプがいつか心をすっかり細められて障子には月の光が斜めに青じろく射している。盆の十六日の次の夜なので剣舞の太鼓でも叩いたじいさんらなのかそれともさっきのこのうちの主人なのかどっちともわからなかった。

（踊りはねるも三十がしまいって、さ。あんまりじさまの浮かれだのも見だぐないもんさ。）むっとしたような憫悍な三十台の男の声がした。そしてしばらくしんとした。

（雀百まで踊り忘れずでさ。）さっきの女らしい細い声が取りなした。

（女こ引ぱりも百までさ。）またその憫悼な声が刺すように云った。そしてまたしんとした。そして心配そうな息をこくりとのむ音が近くにした。富沢は蚊帳の外にここの主人が寝ながらじっと台所の方へ耳をすましているのを半分夢のように見た。

（さあ帰って寝るかな。もっ切り二っつだな。そいでぁこいづと。）（戻るすか。）さっきの女の声がした。こっちではきせるをたんたん続けて叩いていた。（亦来るべいさ。）何だか哀れに云って外へ出たらしい音がした。

あとはもう聞えないくらいの低い物言いで隣りの主人からは安心に似たようなしずかな波動がだんだんはっきりなった月あかりのなかを流れて来た。そして富沢はまたとろとろした。次々うつるひるのたくさんの青い山々の姿や、きらきら光るもやの奥を誰かが高く歌を歌いながら通ったと思ったら富沢はまた弱く呼びさまされた。おもての扉を誰か酔ったものが歌いながら烈しく叩いていて主人が「返事するな、返事するな。」と低く娘に云っていた。さっきの男も帰って娘もどこかに寝ているらしかった。「寝たのか、まだ明るぞ。起きろ。」

外ではまたはげしくどなった。

（ああこんなに眠らなくては明日の仕事がひどい。）富沢は思いながら床の間の方にいた斉田を見た。

斉田もはっきり目をあいていて低く鉱夫だなと云った。富沢は手をふって黙っていろと云った。こんなときものを云うのは老人にどうしても気の毒でたまらなかった。

外ではいよいよ暴れ出した。とうとう娘が屏風の向うで起きた。そして（酔ったぐれ、大きらいだ。）とどうやらこっちを見ながらわびるように誘うようになまめかしく呟いた。そして足音もなく土間へおりて戸をあけた。外ではすぐしずまった。女はいろいろ細い声で訴えるようにしていた。男は酔っていないような声でみじかく何か訊きかえしたりしていた。それから二人はしばらく押問答をしていたが間もなく一人ともつかず二人ともつかず家のなかにはいって来てわずかに着物のうごく音などした。そしていっぱいに気兼ねや恥で緊張した老人が悲しくこくりと息を呑む音がまたした。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店
　　1996（平成8）年6月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　1995（平成7）年5月
入力：ゆうき
校正：noriko saito
2009年8月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

泉ある家

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/